すさまじきもの　解答

A　語句の意味と読み

(1) 興ざめだ。期待はずれで、しらけている。（時季や場にそぐわず、しっくりこない感じをいう） ／★現代語の「すさまじい（ものすごい・はげしい）」とはちがう。テストの定番

(2) 川に竹や木を立て並べて、氷魚（ひお）などの魚をとるしかけ。本来は冬のもの。 ／冬の景物なので、春になっても残っているのは時季はずれ

(3) （客を）もてなす。ごちそうする。 ／名詞「あるじ（饗）」＝もてなし・ごちそう。「主人」の意味の「あるじ」と区別する

(4) 大臣以外の官職を任命する朝廷の行事。ここでは、国司（地方官）を任命する正月の除目をさす。 ／「司（つかさ）」＝官職。「司得ぬ人」＝官職をもらえなかった人

(5) 大声で騒ぐ。にぎやかに騒ぎたてる。 ／★現代語の「ののしる（悪口を言う）」とはちがう

(6) 大臣・大納言・中納言・参議と、三位以上の位の人々。最上層の貴族（公卿）。 ／「殿上人（てんじょうびと）」よりさらに上の身分

(7) 気の毒だ。かわいそうだ。 ／★現代語の「いとおしい（かわいい）」とはずれる。なお、本によってはここを「いとをかしう（＝ひどくこっけいで）すさまじげなる」とする

B　文法

(8) ヤ行下二段活用（動詞「ほゆ」）／連体形。 ／「え・え・ゆ・ゆる・ゆれ・えよ」と活用する。下の体言「犬」にかかるので連体形

(9) 使役（〜させる）／連用形。使役の助動詞「す」の連用形。 ／子を産むのは博士の妻。博士が「産ませる」ので使役。下の「たる」は完了（存続）「たり」の連体形で、下に「こと」などを補って読む

(10) 打消「ず」の連体形＝⑤・⑥／完了「ぬ」の終止形＝⑩ ／⑤はサ変「す」の未然形「せ」に付き、下に体言「所」。⑥の「得（え）」は未然形と連用形が同じ形なので、下に体言「人」が続く（＝連体形）ことで打消と決める。完了「ぬ」なら連体形は「ぬる」。⑩は連用形「たまひ」に付き、文末で言い切っている

(11) 存続（完了）の助動詞「り」の連体形。「合へ」は四段動詞「合ふ」の已然形。（命令形に付くと説明する教科書もあるので、お使いの教科書に合わせること） ／「り」はサ変の未然形・四段の已然形に付く（「さみしい」と覚える）。ここは「騒ぎ合っている」と存続で訳す

(12) 疑問の係助詞。結び＝「たる」（完了の助動詞「たり」）、活用形＝連体形。 ／ぞ・なむ・や・か→連体形、こそ→已然形

(13) 不可能推量（〜できそうにない）／連体形。副詞「え」と組み合わさって、不可能の意味になる。打消推量と説明する教科書もあるので、お使いの教科書に合わせること。 ／「まじき」の下に「者」を補って読む（「まじきは」＝できそうにない者は）

C　主語・指す内容・敬意の方向

(14) 以前この家に仕えていたが、今はよそへ移って散り散りになっている人々（本文の「はやうありし者ども」）。 ／「はやう」＝以前。「ほかほかなり」＝あちこち別々だ。今年こそ任官と聞いて、昔の家来まで集まってきた

(15) 主人が官職に任命されたことを知らせに来る使いが、門をたたく音。 ／除目の終わる明け方になっても知らせが来ないので、家の中の雲行きがあやしくなる

(16) 作者（清少納言）から、上達部への敬意。 ／地の文の敬語は作者からの敬意。「たまふ」は尊敬語なので、動作をする人（退出する上達部）を敬う

(17) 話し手（よそから来た者）から、殿（この家の主人。任官を待っていた人）への敬意。 ／会話文の敬語は話し手からの敬意。尊敬の助動詞「す」と尊敬の補助動詞「たまふ」を重ねた形（二重尊敬）

D　口語訳

(18) 博士が、続けて女の子ばかりを（妻に）産ませたこと。 ／「の」は主格で「〜が」。「うち続き」＝次々と続いて。「たる」の下に「こと」を補う

(19) （様子を聞きに行った下男が）ひどくつらそうに歩いて来るのを見る（家の）者たちは、（結果を）たずねることさえできない。 ／「え〜ず」＝〜できない。「だに」＝〜さえ。下男のようすで、結果が悪いと察してしまう

(20) 殿は何（の官職）におなりになったのか。 ／「か」は疑問。「せたまふ」は尊敬なので「おなりになる」と訳す

(21) 古くから仕えている者で、そう簡単には（この家を）離れて行くこともできそうにない者は。 ／「の」は同格（〜で）。「さ」＝そのように（一人二人と去って行った者たちのように）。「まじき」の下に「者」を補う

すさまじきもの　解答／現代語訳

E　内容・記述

(22) どちらも、本来ふさわしい時からずれているから。犬は夜にほえて番をするものなのに昼にほえ、網代は冬に使うものなのに春になっても残っている。時季はずれで役に立たず、しらけた感じがする。 ／★「すさまじ」＝時季や場にそぐわない不調和。三、四月の紅梅の衣（冬から早春の色）も同じ理由

(23) 博士の家は学問を受け継ぐ家で、跡を継げるのは男子に限られていたので、女の子ばかり続けて生まれると跡継ぎができず、期待がはずれてしまうから。 ／当時、女性は博士の官につくことができなかった

(24) 主人は今年も官職を得られず、「前の○○の国司」のままだということ。はっきり「任官できなかった」と言うのはつらく、きまりも悪いので、前の官名だけを言ってぼかしている。 ／「前司」＝前任の国司。新しい官名を言えないので、昔の肩書きを言うしかない。「にこそは」の下には「あらめ」などが省略されている

(25) 古くから仕えていて、ほかの者たちのように簡単にはこの家を離れられない人々が、来年国司が交代するはずの国々を指折り数えて望みをつなぎ、体をゆすって歩き回っているようす。作者はそれを、気の毒で、いかにも興ざめなようすだと評している。 ／期待して集まった人々が去っていく中で、去れない者だけが来年に望みをかける。同情（いとほし）と興ざめ（すさまじ）が重なっている

F　文学史（本文全体をふまえて答える）

(26) 作者＝清少納言／仕えた中宮＝定子（一条天皇の中宮定子）。 ／平安時代中期（十一世紀初めごろ）の成立

(27) 類聚的章段（ものづくしの章段）／ほかの二つ＝日記的章段（回想的章段）・随想的章段。 ／「〜もの」「〜は」で始まる段が類聚的章段。「うつくしきもの」「にくきもの」も同じ仲間

(28) 『方丈記』＝鴨長明／『徒然草』＝兼好法師（吉田兼好）。 ／どちらも鎌倉時代の作品（『徒然草』は鎌倉時代の終わりごろ）

【現代語訳（全文）】

興ざめなもの。昼にほえる犬。春の網代。三、四月の紅梅がさねの着物。牛が死んでしまった牛飼い。赤ん坊が亡くなってしまった産屋。火をおこしていない角火鉢やいろり。博士が続けて女の子ばかりを（妻に）産ませたこと。方違えに行ったのに、もてなしをしない家。まして節分（の方違え）などのときは、ひどく興ざめだ。

（中略）

除目で官職を得られなかった人の家（は興ざめだ）。「今年はきっと（任官する）」と聞いて、以前（この家に）仕えていた者たちで、今はよそに散り散りになっていた者や、田舎めいた所に住んでいる者たちなどが、みな集まって来て、出入りする牛車の轅もすき間がないほど（たくさん）見え、（主人が任官を祈って）寺や神社に参るお供にも、われもわれもと参上してお仕えし、物を食べ酒を飲んで、大声で騒ぎ合っているのに、（除目の）終わる明け方まで、門をたたく音もしない。おかしいなどと、耳をすまして聞くと、先払いの声々などがして、上達部などはみな（宮中から）退出なさってしまった。様子を聞きに、宵のうちから（出かけて）寒がってふるえていた下男が、ひどくつらそうに歩いて来るのを見る者たちは、（結果を）たずねることさえできない。よそから来た者などが、「殿は何におなりになったのか」などとたずねると、返事には「何々の前の国司ですよ」などと、決まって答える。

本当に（主人の任官を）あてにしていた者は、ひどく嘆かわしいと思っている。翌朝になって、すき間もないほど詰めていた者たちは、一人二人とそっと抜け出して去って行く。古くから仕えている者で、そう簡単には（この家を）離れて行くこともできそうにない者は、来年（国司が交代するはずの）国々を、指を折って数えなどして、体をゆすって歩き回っているのも、気の毒で、いかにも興ざめなようすである。

▸ 古文・漢文の参考書のおすすめ（楽天・Amazonのリンクつき）　kotennosennsei.com/koten-kyozai-review/　　▸ 解説記事にもどる